

語りへの包摂・語りへの排除 —ナラティブと心理主義化—

崎山 治男ⁱ

本稿はナラティブ・アプローチの隆盛と心理主義化との関連を社会的に考察することを目指したものである。ナラティブ・アプローチは「大きな物語」の終焉と身近な物語への注目という社会構造・意識と並行して登場し、社会学、心理学等に定着しつつある。それは、社会構造というフレームや計量調査といった方法論では必ずしも十分にすくい取れない人々のリアリティをくみ上げた。また、物語の語り直しを通じた自己や関係の変容といった一定の臨床的な効果もある。だが他方で、ナラティブ・アプローチが提供する語彙が主として個人の心理や過去の人間関係を問題として取り上げることから、問題を個人の心理に矮小化する心理主義を推し進める面もある。本稿では、統治と排除をめぐる空間論として近年注目されてきた包摂的排除という概念を用いて、こうしたナラティブ・アプローチの普及がもつ両義性を描き出す。

キーワード：ナラティブ・アプローチ、心理主義化、包摂的排除、自己物語

1. ナラティブ的転換の社会的含意

今日、臨床心理学をはじめとして、社会学、看護学、老年学、障がい学等々で注目されているナラティブ・アプローチの隆盛は、1990年代からはじまるもので、比較的新しい現象である。だがそのことはこのアプローチが軽視されていいものであるとか、真空からうまれたものであることを意味しない。むしろ、ナラティブ・アプローチの短期間での隆盛は、今日という現代社会の特徴を映し出しているものであるとさえいえる。まず、その歴史的、学問的な背景を示しておこう。

ナラティブ、物語というコトバは同一ながら、いささか異なった意味で提唱され、今日のナラティブ論の隆盛を導く要因となったと考えられる社会的背

景を指し示す着想がある。それは、80年代のポスト・モダニズム思想をリードし、かつ当時の歴史的・社会的状況を表したリオタールの「大きな物語の終焉」というものの見方である〔Lyotard, 1079 = 1986〕。

この大きな物語を一言で表現しようとするならば、理性的主体としての人間が社会発展という目標を目指すことこそが人類史である、という物語である。そこでは、西欧近代になって自然科学という道具を手に入れた人間＝主体が、自然・世界・他者と向き合う中でその理性的判断に磨きをかける。その上で、異なった主体間での協働、階級や立場の調停、歴史的使命の獲得によって理想的な社会状態にたどり着けるのだとされる。

このようなあるべき人間についての物語に学問的な疑いがもたれたのが20世紀末の思想状況の一つとっていいだろう。いわゆるポスト・モダン哲学の隆盛の中で理性の歴史的・地理的な相対化が図られ

i 立命館大学産業社会学部准教授

た。その中では、人間を目的論ではなく記号的な意味でとらえ直そうとする見方が提唱され、そのことによって主体と近代の発展という物語に疑いの目が向けられた。

また、社会的にも西欧社会の発展の物語が、80年代後半からの冷戦終結と共産圏の崩壊によりその有効性を失われることとなった。このように、大きな物語が90年代の人間像と社会の双方においてもはや終焉したことが、その是非は論争となるが語られた¹⁾。

そこで登場してきたのが、人々はもはや大きな物語を生きることはできないとされることによる問いである。大きな物語にすがることができない、あるいはすでに大きな物語とは異なった物語を生きていることをいかに、どのように考えるべきかという学問的な、ひいては社会的な要請が浮上した。

人々がもはや大きな物語を生きることはできない以上、大きな物語に沿っているか否かという基準で人々を調査し、社会意識を描くことは、大きな物語の抑圧性と同じく欺瞞であり、暴力ですらある。

それに加えて、必ずしも大きな物語と相同関係をもつものではないが、大きな物語を支えつづけてきた当時の自然科学モデルに沿った定量モデルの社会調査、社会心理調査こそが科学的に特権的なものであるとされてきた歴史もある。

この社会調査研究にも作用した大きな物語に対置し²⁾、人々がどのような生を生きているのかをいかに描くか。それは必ずしも大きな物語に沿うものではなく、むしろ複数でユニークであることをどのように、学問上のコトバに載せるのか。多数の、多様な生がやりくりされるありさまをどのように記述し、それを決して個人的なものとせず社会へと架橋するのが問われだした。

このように、人や社会を貫いていくものとされてきた、近代的な理性的主体とそれが紡ぎ出す大きな物語の終焉というインパクトがあった。その反作用として、個々人が必ずしも大きな物語を生きる存在ではなく、それに従ったり従わなかったりする生き

方や、大きな物語がもつ問いの射程には浮かび上がらない、具体的に生きられた自己の物語への注目がうまれる。

そのため、ナラティブ・アプローチは、理論的には大きな物語が用意してきた生をとらえる方法論と自己論とは異なった前提の上に立つ、ポスト・モダンの哲学・社会学・心理学等々の方法論や自己論と親和性をもっている。

具体的には、ナラティブ・アプローチとそれが提供する生をとらえる方法論と自己論は、生理・発達・歴史段階論等々の諸条件・状況によって個々人の生と自己は規定され、その中に自己は位置づけられるとする自己の本質論を拒絶する。むしろそれらとは逆に、自己とは社会的な諸力に規定されながらも、それぞれの生の中で自らや他者に語る物語の東であり、ナラティブの中で構成されるものだという前提に立つ。

これらが、社会学・心理学等のナラティブ的転回³⁾を支える社会的背景と研究する側の立脚点である。それと相互反映的にナラティブ研究の対象となる対象者や社会意識も変化した。それは、1980年代～90年代になり、これまで語りづらかった、あるいは語られないこととされてきた社会問題のただ中にある自己の状況を語りうる場や社会状況が現れたことがあるだろう。

社会学者の Kitsuse は、80年代の社会状況を、これまでは語ることそのものが抑圧されてきた、あるいは語るコトバがなかった人々が、自らを取り巻く問題状況に声をあげカミング・アウトによる状況の変革を訴えるようになってきたと指摘している。このように、問題的な状況に対するナラティブを得ることによって自らを語り直そうとする「強い」主体、場合によっては社会変革をも目指そうとする主体が立ち現れてきたことも、ナラティブ・アプローチの隆盛の背景としてあげられるだろう [Kitsuse, 1980, 草柳, 2004]⁴⁾。

これに呼応するかのように、研究の側にも、大きな物語の終焉とポスト・モダンの状況における生の

ありかを探ろうとする動きと相まって、ナラティブをすくい上げようとする動きが広まった。具体的には社会学の分野で、計量的な調査が調査票の中に人々の声を押し込めたり、階級を主としたイデオロギーの中へと回収したりすることへの批判から、質的調査の重要性が提唱され始めたのが90年代である。

まずそれは、質的調査法の輸入と、それを練り直した半ばガラパゴス的な発展とが平行して進行した。そして、問題的な状況において自らを語り直そうとする人々の声をすくい上げることで発展し、たとえば社会調査土過程の要卒科目にまで「昇格」したことにみられるように、社会学でもノーマル・サイエンスと化しているように思える。

それは管見する限り、質的な心理学研究においても同じような状況にあるかのように思われる。それは自己が必ずしも生理的機構や本能に還元されるだけではなく、ナラティブの束として自らを語り直すという地点に立脚する。

その上で、何らかの問題状況を抱える人々の語りをすくい上げていくことをその目的の一つとして、臨床心理士が資格化・制度化されたのがこの時期である⁵⁾。そのような改革の中に、2000年代の日本におけるEBMを元とした医療の提唱を補完するためにこそ、そこでクライアントが感じる思いや語りを受け止めるNBMの提唱が位置づけられるだろう[斎藤, 2011, 2014, 2016等]。

このように、90年代から現代にいたる、語る主体のナラティブへの注目がさまざまな学問領域でみられる。そこでは、語ることそのものを尊重しつつ、それに耳を傾けたり応答することこそが、理解（研究）を深めたり、ポジティブな臨床の効果をもたらすと考えられている。そのような効果は、どのようなにもたらされるのだろうか。そして、必ずポジティブな効果を生み出すのだろうか。

2. ナラティブを語る条件：語りへの包摂

これまでみてきたように、現代にいたる個々人の

ナラティブの復権とその称揚は、大きな物語によって隠されてきた個々人の物語へと再度目を向け、そこに何らかの価値を与えようという学問的・社会的な流れの中に位置づけられる。

その源流の一つとして、大きな物語では決してみえない物語にこそ人々の生きられる生の真実があり、それに対面する姿勢を保つことこそが研究であり、かついわば倫理的姿勢でもあるという発想がある。

日本におけるナラティブ研究のみならず、質的調査研究に多大な影響を与えたクラインマンは、その著書『病の語り』において、急性期の治療＝回復モデルが適用されがたい慢性疾患を多様なナラティブの交錯としてとらえるべきだとする。そこでは、回復することとしないこととの間で揺れ動く患者のナラティブへの注目、疾患が患者にもつナラティブと社会にもたれるナラティブとのズレ、疾患そのものへの痛みがナラティブとなるか否か等々が研究対象とされるべきだと示されている [Kleinman, 1988 = 1996]。

また、これまで医療における治療と回復という物語に對置させる形で、患者のさまざまな物語のプロトタイプを示し、ナラティブ・アプローチの展開に多大な影響を与えたフランクは、その著書『傷ついた物語の語り手』において物語の多様性と性質に注目すべきだとする。

彼は、慢性疾患や困難な生を生きる人々の身体こそが、ナラティブを誘発すると考え、その視点に基づき身体とナラティブの二元論を否定する。そして、傷ついた身体に触発されたナラティブについて、プロットが用意されておらずあてもなくさまよう「混沌の語り」、回復へと行きつ戻りつ進もうとする「回復の語り」、生の意味を模索する「探求の語り」など、示唆的な概念化を試みる。その上で、他者が発するこれらのナラティブの場に居合わせ、耳を傾け応答する構えを示すこと、自らの物語でさえもその変化が予測がつかない場に居合わせることに、自己や他者への倫理と共生の可能性を見いだそうとする [Frank, 1995 = 2001]⁶⁾。

彼らの立論やそれに触発された研究の展開では、ナラティブ研究をこれまでの定量的かつ大きな物語に乗るモデルでは必ずしも十分に研究されてこなかった対象へと振り向けることが志向されている。その上で、ナラティブを語る者同士が語る行為を通して、問題的状況を共に抱えるものとしての共生への倫理へ開かれたり、問題的状況への新たな気づきが促されたりすることが目指される。

そして、学術的にはこれらに時には参与しつつ、対象者のナラティブを、語られる場に対して自らが与える効果に自覚的でありつつもあるがまさに丁寧に記述することがもとめられてきている。

大きな物語は失効し、神は細部に宿る。ゆえに定量調査ではなく定性調査が有効であり、そのための有力な武器としてナラティブ研究がある。その各々の命題が正しいものなのか、そして一直線に成立するものなのかについての議論はここではひとまず措こう⁷⁾。ここではそうした調査論を展開していくのではなく、ナラティブ的転回後の人々の生や社会を分析する研究者の立ち位置、あるいは語ることを欲する社会意識を確認しておきたい。

このような語りへの志向は、単にこれまであまり語られてこなかった事柄を明るみにしたり、語ることを通して関係構築に寄与したりしただけではない。ある意味、ナラティブを語ることが語る当事者にとって、問題をそれとして認識したり、オルタナティブなとらえ方をしたりするようになることが臨床的な効果をもつとされたことがある。

このような語りを介した問題や自分自身のとらえ直しは、「物語の書き換え」を通して自己の書き換えと回復としてとらえられてきた。ナラティブ論では自己やそれを取り巻く関係が何らかの生理的・心理的・社会的な諸状況だけに決して還元されるものでなく、自己自身を取り巻くナラティブを選び取って語られる中で構成される物語の束ととらえられる[White & Epston, 1990=1991, 浅野, 2001等]。ならば、そのナラティブのとらえ返しをおこない、別様のナラティブを選択することで自己や自己を取り

巻く関係の書き換えがなされうる。その中で別様のものの見方が行えたり自己認識ができたりすることを臨床的效果として目指す。

狭義のナラティブ論に限らず、2000年代以降展開されてきた社会学領域での質的調査は多かれ少なかれ、こうした自己や関係性の転換の契機を細部に宿る神として追求してきたともいえる⁸⁾。その中でも、特にナラティブ論の角度から掘り下げた研究がなされてきたのは、アルコール依存や虐待などを主な対象としたセルフヘルプ・グループ研究であろう。

そこでまず目指されているのは、社会において明示的、あるいは暗示的に正しいとされる物語であるとされる、ドミナント・ストーリーが提供する物語に自分が絡み取られていた抑圧への気づきである。

たとえば、アルコール依存であれば機能不全家族であり、そこに育ってきた子は愛情不足で育つため、大人になっても自己に不全感をもってしまうというものの見方がある。そして、世代間連鎖という考え方にみられるように、成人して新しい家族を作ったとしても、また新たに機能不全家族を作ってしまうというのだとされる。

ナラティブ・アプローチはこうした状況そのものを変えることを目指すのではない。それは、問題となる状況そのものを変えることは物理的に、あるいは時間軸上で困難なことがある。また、問題となる状況そのものが、果たして真に問題と定義できるのか、という課題や、その中で生きてきた個々人の生の問題とは何かが個々人によって違うというヴァリエーションの課題もある。

こうした点を、社会構成主義のナラティブ論を提唱、展開してきたガーゲンらは以下のように表している。

治療的対話とは、対話を通じてのお互い同士の探索であり、相互の交流の中で、アイデアの交換を通して今までとは異なる新しい意味を発展させ、問題を正面から「解決せずに解消する」方向へと向かう。つまりそれは、いわゆる治療システムを解消するも

のであり、問題を編成し問題を解決せずに解消するシステムである。……変化とは、新しい物語を対話によって創造することであり、それゆえ、新たな主体となる機会を拓けることである。物語が変化をもたらす力をもつのは、人生の出来事を今までとは異なる新しい意味の文脈へと関係づけるからである。

人は、他者との会話によって育まれる物語的アイデンティティの中で、そして、それを通じて生きる。

[Gergen. & McNamee, 1992=1997, pp. 64-65, 強調引用者]

このように、問題的な状況そのものを変えるのではなく、それに付随する物語を書き換え、生を新しい意味に置き換えていくことが目標とされる。アルコール依存と虐待、という先述した例でいうならば、アルコール依存や虐待という問題を完治することは難しいし、生きられた後では不可能でもある。

だからそうした方向性を目指すのではない。時空軸の上で変えられるもののナラティブを変える。たとえば、成人した後に世代間連鎖をし、また新たに機能不全家族を作るかもしれないという物語を変えることを、たとえばそれへの注意があるだけでも変わる、という意味づけをすることで目指すのである。

こうした語りをおこなうための空間として、セルフヘルプ・グループ間での差はあるが、多くの団体では、精神科医、カウンセラーなどの専門家が参加することには慎重な姿勢を保っている⁹⁾。それは、多くの専門家はドミナント・ストーリーをつい語ってしまう、あるいは押しつけてくるものであり、セルフヘルプ・グループでオルタナティブ・ストーリーを組み立てる際の障害となりえるという見方による。また、それは、上記の引用で示した旧来の医療者主導の治療モデルを避けるという意味もある。

さらに、物語を語る際の一体感ということもある。ドミナント・ストーリーが支配する社会の中で類似の生きがたさを経験する・してきた集団であればこそその共感がある。その上で、自身のこれまでの生をめぐる物語や、ドミナント・ストーリーへの違和感

などを率直に語りやすい空間が目指される。

そこから、多くのセルフヘルプ・グループでルールとされる「言いつばなし」、「聞きっぱなし」の原則が導き出される。自己物語の書き換えにいたるためには、原理的にまず、自らの過去～現在に至るまで生きてきた経験の語り直しをし、その中でのエラーや変えられる点への気づきもたらされる。そのため、まずは語りへの邪魔にならないようにすることと、語る中で自らがまず第一にアイデンティティの変化に気づくことが優先される。そればかりではない。他者の語りの中でのさまざまな経験を聞いている中で、自身の物語との類似性を気づいたり、自己の物語の過ちを発見し、それを書き換えたりしていく効果もある。

これらのことがさらに肯定的な効果をもつこともある。セルフヘルプ・グループの特徴の中で前述したように自らの語りが他者の気づきに何らかの肯定的な効果をもったという感触をえること。語りを誘発したり、「感想」を述べる場においてさまざまな助言をしたりすること。これらのことによって、自己が他者の役に立てるという自己肯定感をもったり、逆に以前の段階に戻ってしまうことを防ぎ、さらに自分自身が物語を書き換えていったりする可能性があると考えられる。

ガードナーとリースマンは、この点を「援助者療法原理」(Helper-Therapy Principle)と名づけ [Gartner & Riessman, 1977=1985]、野口はそこにセルフヘルプ・グループでの共生の原理と相互の価値づけの契機を見いだしている。

AAの場合、メンバーは匿名で参加し、「言いつばなしの聞きっぱなし」方式のミーティングを特徴としている。メンバー間での「助ける人」と「助けられる人」との役割が多様な活動によって相互互換的に変化していき、「助けることによって助けられていく」という共通体験が深まる。ガードナーとリースマンは、「援助する人がもっとも援助を受ける」ということを「援助者療法原理」と名付けており

「援助者であることは気持ちのよいことである。それは私たちに、自制心や存在価値や能力があるという感じを強めてくれる」と述べている〔野口, 2005, p. 110, 強調引用者〕。

もちろん、セルフヘルプ・グループが社会のメインストリームであるとはいいいがたい。何らかの生きがたさや問題を抱えたままそれを物語化できなかったり、セルフヘルプ・グループ、あるいはそれが仮想敵としてきた専門機関にアクセスできなかったりする方が圧倒の多数であろう。

だが、大きな物語が終焉し、その代わりにいわば小さな物語を語っても良い、語るべきだというベクトルへと社会、問題へと対応する組織や個人、そして研究が向かってきているのも確かだといえる。いわば社会状況が「個人的なことは政治的・社会的なこと」から「政治的・社会的なことは個人的なこと」へと移りかわる中で、個々人のナラティブはどのような方向に水路づけられているのだろうか。

3. ナラティブを語られる条件： 心理主義化・個人化する語り

「個人的なことは社会的なこと」であり、「社会的なことは個人的なこと」であることの相互反映性は、一時の社会運動のスローガンを待たずとも、社会学の基本的な発想であり、それそのものは正しい。しかし、社会現象、あるいは研究や臨床のあり方としてみるならば、どうとらえるべきなのだろうか。

これまで述べてきたように、ナラティブ・アプローチが登場し、普及してきた背景には大文字の物語を補強、ないしは対立する個人の物語として個々人の生とその自律性を尊重しようとする流れがあった。確かに、これまで述べてきたようにさまざまな社会病理の臨床的な効果を目指して、あるいは従来型の医療では見落とされてきた声を補完するものとしてナラティブ・アプローチは「発見」された。その中では、後述するようにさまざまな状態に対するナラ

ティブが発見され、普及した。その意味では、確かに現代社会は語ることによって「ラク」になりえる状況がふえ、至る所で語ることで自己や社会を改めて問い直す機会が増えてきたと見なすことができるかもしれない。

しかし、社会全体でみるならば、さまざまな語りが流通しており、その中には必ずしも臨床場面にとってあまり有効とはいえないものが多い現状もある。たとえば、非行、貧困、児童虐待、アダルト・チルドレン、トラウマ等々のもののほとんどすべてに、広範に伝わるものとしては私たちがマスメディアで伺えるような当事者の語りがある。また臨床場面の関係者という狭い範囲でみるならば、ほとんどの事象において語りの共同体としてのセルフヘルプ・グループが存在している。

こうした現代社会の事象のほとんどについて、私たちが理解しやすく、また当事者自身も語るステレオタイプ化された語りがある。たとえば、非行であれば家庭の貧困や情報化。児童虐待などでは、母性愛の不足や愛着不足、世代間連鎖。アダルト・チルドレンであるならば機能不全家族と父親役割の不在等々。

このように、社会からあるいは当事者からも社会問題とされ臨床的な介入が要請される事柄については、古くからあるものでも新しく登場してくるのであっても、私たちがつい納得してしまうような、ステレオタイプ化された語りが存在する。

その第一の負の効果は、これらの語りによる思考停止と社会問題へのものの見方の固定化である。少年非行の背景にスマホ依存のナラティブが流れたり、児童虐待の背景に親のアルコール依存のナラティブが流れたりすると、私たちはそうした見方で物事を固定化してしまおう。そして、時代や社会背景を異にすれば別のナラティブが流通していたことを忘却してしまったり、ある問題の要因とされるものにまつわるナラティブを他の要因にも適用してみたり、強化してみたりしてしまう。近年でいうならばスマホ依存やゲーム脳のように、ある種耳障りがよく当

てはまりそうな物語を社会問題のドミナント・ストーリーとして強化していくのだ。

このような、ドミナント・ストーリーが用意されている現代社会という空間では、逆に、そうではないような物語は排除されていく。たとえば児童虐待であるならば、世代間連鎖の不在、子供への単純な憎しみといった語りはなかなか聞かれない。また当事者によっても、少なくとも社会的に流通する形ではなかなか語られない。もし語られるならば、何らかの精神疾患という別種の物語にされてしまうだろう。

さらには、物語の不在や語られない事柄の存在がある。たとえば、LGBTについてカミングアウトすること、あるいは教育現場で語ること。この物語はつい最近になって登場してきたものであり、未だに根強い偏見があったりもする。だからこそセクシャリティ以外では何ら異性愛者と変わらない像、正確にはセクシャリティが周囲に常に志向されるわけではない、という当たり前の像が描かれなかったりするし、そもそもなかなか語られなかったりもする。この物語をめぐるポリティクスについて、物語がもつ権力作用に注目するプラマーは以下のように指摘している。

第二の問題は、ストーリーを生産し、消費する社会過程にかかわる。……いかにストーリーは生産されるのか、何によって人は語るようになるのか。いかに人はその人特有のストーリーを構成するのか。さらに、何が人を沈黙させるのか。……第三の問題は、ストーリーが果たす社会的役割に関わる。いったんストーリーが語られたら、それらは人々の人生と社会にどのような機能を果たすのだろうか。支配的な秩序維持の保守的な機能を働かせるために、ストーリーはどのように作用しているのか。そして生活や文化に抵抗したり変えたりするためにどのように利用されてきたのか [Plummer, K, 1995=1997, pp. 49-50, 強調引用者]。

物語をめぐるポリティクスの中で否が応でも語られなくなる、語りにくくされるナラティブ。あるいは現代日本というならばLGBTの芸能人等のある種の表象にみられる物語の転調。

それは、記憶等をめぐって、もちろんナラティブ研究にも関わるが、あるナラティブを保持しているか否かについての定義権として時間軸で争われることもある。あるいはそれに抗うためにこそ、ナラティブの転回にともなう質的調査研究で語りを聞くこと、証人になることが倫理として問われることもある。

だが、その際にも必ずこぼれ落ちてしまう語りが、物語の語り手、聴き手の双方が語りを価値づける中でついつい生じてしまうだろう。この種の、正当性をめぐる物語のポリティクスにおいて沈黙を強いられる物語と異なる意味での、その時々には気にもとめられず、置き去りにされてしまうけども、結果として支配的な秩序の維持につながる、ドミナントな物語をどのようにあつかえるのだろうか。とりたてて問題と意識されないからこそ巧妙に、日常生活で私たちを取り巻く物語の圧倒的多数はそれなのではないだろうか。

加えて、語ることの強調が、個々人を分断し、問題を個人の問題としてしまう傾向も指摘されつつある。そもそも、これまで述べてきたようにナラティブへの注目という社会の潮流が、何らかの生きがたさや困難の原因と対処とを大きな物語に乗った社会変革から個人の小さな物語での書き換えという個人化の文脈の上にある。

おそらくは、その延長線上に相互に補強し合う形で、個人の物語が主として精神医学や臨床心理学から供給され、またそれを聴く職種や体制にそうした学問を修得した人々がついていった。供給されてきた主な概念としては、「トラウマ」、「心的外傷」、「ADHD」、「世代間連鎖」等々現在では日常用語にさえなったものまでである。

このような概念や専門職種が90年代以降日本社会で急速に広まり、資格化されたことを心理主義化と

とらえることができるだろう。それを批判的にとらえるならば、さまざまな心につわる問題を疾患判断基準の俎上に載せ、科学的な装いの下で自らの専門的な管理下におこうとする医療化論とも結びつくだろう。また、これらの概念の発見と普及に対処すべく整備された制度や職種が、かえって現場において対象となる人々を統制におくという専門家支配論と結びつくかもしれない [崎山, 2008]。

だが、ここではむしろナラティブにおける心理主義化の效果に注目を進めてみたい。この点について社会学の分野では、ベラーらが先駆的に『心の習慣』の中で大きな物語の衰退にともなう個人化と自己の心の表し方を気にかける社会への変化にともなう「心」への意識の傾斜とカウンセラーへの需要の増大に対し、問題の個人化と批判的に考察している [Bellah, et. al. 1986=1991]¹⁰⁾。

また、リアリティの構成を社会的に分析するバーガーは「心理主義の現実の固定化」として、現代社会を分析する際に心理学的な解釈図式がいわば個々人の自己の真実と見なされる傾向があるとし、以下のように述べている。

心理学理論がもつ実現化という力はとりわけ大きなものだ。心理学はいったん社会的に確立されるようになると（つまり、もしそれが客観的現実の正しい解釈として一般に受け容れられるようになると）、それが説明すると称する現象の中で強力に自己を実現化しようとする傾向をもつ。心理学の内在化は、それが内的現実と関係するという事実によって促進され、その結果、個人はそれを内在化するという他ならぬこの行為のなかで、それを実現化するのである。……心理学は一つの現実を創造し、この現実はまだ心理学の正しさを立証するための基礎になる [Berger, P. 1966=1977, pp. 302-303, 強調引用者]。

バーガーが指摘するように、心理学という知識の「正しさ」は、それが当てはめられる自己の内的な真実と照合される。だからこそ、臨床心理学の知識

やそれが提供するナラティブに直面したものは、それと自分の真実の内面と照らし合わせる。たとえば、ADHD という概念を提供されたとするならば、それが示すさまざまな特徴と自己との正誤表を作る。

一方、この作業をおこなう当該の人物は、問題経験があるからこそそうした概念を必要としてその場に居合わせたのであり、また、多くの臨床の場で提供される心理学的概念は何らかの程度の差はあれ、個々人に当てはまってしまう。かくして、ADHD という概念はその正当性を維持したまま新しい現実を作る。

このように、心理主義化するナラティブは、小さな物語に真理を見いだそうとする心性、精神医学や臨床心理学という科学的な知、そして両者が相互に反映する中で現実をつくりあげていく。

この種のナラティブの心理主義化に対する批判としては、さまざまな臨床心理学・精神医学の概念についての系譜学的な批判もある。また、前述したような医療化・専門家支配といった批判もある。だが他方で、二節で述べた語ることを欲する人々、社会がある。また現に三節で述べたような心理主義的なナラティブが臨床的に効果をもち、それによって自らが抱える問題のコトバを見つけられた人々もいる。

問題を個人の心に限定し、心のコトバで語ろうとする心理主義のナラティブが進む中でかえって社会の問題が消される危険性が権力論の文脈から指摘される。だが他方で、まさにそのコトバによって自らの問題を発見できたとする臨床場面と、それを記述する調査こそがリアリティであることとの狭間で、どのような語りが有効なのだろうか。

4. 語りへの包摂・語りへの排除

さて、こうした問いに対しては、いわば接ぎ木論がまず有効な解として考えられる。つまりは、心理主義にかけていた社会的側面をつなぎ合わせる、あるいは逆に社会学にかけていた心理的側面をつなぎ合わせることである。臨床心理学に家族・社会アブ

ローチを継ぎ足すことや、逆に社会学、とりわけ社会問題論に臨床心理学の知見を取り組んだ形で理論や施策を打ち出すことである。こうした取り組みは近年、学際的な取り組みとして急速になされてきている〔崎山, 2007〕¹¹⁾。

それが社会学の臨床的応用という場面において、効果を発揮する面もあろう。たとえば、DVという問題にたいしてDVを受けてきたことを自責化しないオルタナティブ・ストーリーやそれを語る場を提供するといった事柄をもたすかもしれない。また逆に、医療という場面で臨床心理学の知識を動員して患者のナラティブに寄り添おうとすることが、単に医療的な正しさのみならず、患者の社会性を重んじることをもたすかもしれない。

このように、受け手のナラティブを尊重すること、それに沿ってさまざまな学問知や実践知を提供していくことで臨床の場が上手く運営されていく肯定的な可能性も確かにある。そしてそれこそが、ナラティブにベースをおいた研究の探索的・実践的な価値であるとまづいえるだろう。

だが、他方、前節で述べたように、現代社会において私たちが声をあげ、物語として語ることが社会的に多く許容されているのは、個人の小さな物語であり、それを心理的な語彙で綴ることでしかなかったりもする。この事実と、前述したナラティブ・ベースの研究・実践について考察を進めてみたい。

近年の日本社会において、私たちが自らの問題を語る際にどのような語彙を用いているだろうか。そして自らや他者に共感をえることが可能だろうか。

たとえば今週一週間、あるいは今朝起きてからここまでのことを振り返ってみてほしい。大きな社会問題については、せいぜいが朝のニュースか新聞を読む程度だろう。号外が出たりするような大きな記事であるならば、家族・友人間で話題にするかもしれないし、自ら問題にするかもしれないが、社会の問題はあまり語らない。

また、多くの場合にそれなりの格好をしていることは気にするだろうが、身なりや所持金等々、日常

生活に関わることもよほどのことがなければあまり問題として語られることはない。

それに対して、駅に向かう際に通行人がぶつかってくるのを「自己中の人が増えている」と思ったり、スマホをいじっている人を「スマホ依存」と思ったり、語ったりする。その際の語りは、必ずしも厳密に心理主義のタームではないかもしれない。だが、「むかつく」、「うざい」等々の心理的、一時的な感情や心の現れを表す語彙でもある。

このように自らを取り巻く問題を語る心性について、近年の社会問題で注目されている包摂と排除という命題から見なしてみよう。ヤングは、現代の社会問題における問題の処理の仕方とそこに携わる人々の関係について、主として都市部における移民やゲッターの住民を念頭に、「包摂的排除」という新しい見方を提唱している。

現代社会において、こうした人々と共に住み生活することに関して多文化共生という理念を掲げ、法的・制度的な受け入れ体制を否定することは難しい。しかし、都市部における再開発にともなう治安や景観、地域の価値（地価）の維持に向け、移民や下層の住民の浄化（＝ジェントリフィケーション）を欲するアッパー・ミドル層にとってはホンネとしては避けたい事態である。だからこそ、実際には家賃・賃金という金銭の有無、職業や住居の有無という「公平」な基準を敷いた上で排除をおこなう〔Young, 1999=2007, 2007=2008〕。

その中には家庭内のハウスキーパーとして、低賃金で日中の労働につかせて包摂する。そして夜間は、カードキーによりロックされたゲートと監視カメラによって排除するというように、都合の良い面だけを包摂し、都合の悪い面を排除したりすることもあるだろう。

このヤングの発想は、都市における空間・職業を念頭においたものだが、これを社会における言説、ナラティブの流通の仕方に転用することもできるだろう。すなわち、現代社会において、心理主義化されたナラティブと社会問題は包摂的排除をもたす

否定的な可能性もあるのではないだろうか。

社会制度や医療機関と個々人のナラティブの双方を尊重する理念を掲げ、体制を整えることはとても重要なことである。ただ、その中で実際にはその片方が欠けた運用がなされることがありえる。

たとえば、ナラティブだけが尊重され、社会制度や医療機関が整備されなかったりすることがありえる。さらには、社会の中で聞き届けられ、尊重されるナラティブの偏り、といった問題もまたありえる。

ナラティブ研究においてそれを重視し、ケアや医療等に生かすことの重要性は指摘される。ただ、その中でも、たとえ一節で述べたような倫理的な態度をとったとしても聞き届けられないナラティブがあったり、ナラティブを聴いてこと足れりとしたりすることが、たとえば特に今後の終末期ケア等でありえるのではなからうか。

また、社会におけるナラティブの流通と権力、という問題もある。前述したように大きな物語から小さな物語へという現代社会の特徴があることは前述した通りである。その中で過去と比較すると多様なナラティブが流通するようには確かになった。その中でもやはり、ナラティブとして語れたり語れなかったりする事柄がしばしば論争になったりすることもある¹²⁾。

ここで、心理主義的なナラティブの今日的な特徴を包摂的排除という視点から指摘しておきたい。それは、心理主義的なナラティブは現代社会において大枠では包摂されるが、それと反転して社会構造・階層や経済的格差を語るそれは排除されるという事態である。

90年代からモノの豊かさから心の時代への移行が叫ばれ、それもあって大文字の物語から小さな個人の心をめぐる物語への移行があった。それとあわせて医療機関をはじめとするさまざまな制度・機関も心のナラティブに重点をおいた体制が組まれた。

もちろんそれはそれで良いことではある。その不足と拡充を訴えることは社会的に、予算の限界はあるだろうが包摂される。ただしそれは、社会制度

や医療機関が許容する範囲であり、それ以上の手にあまる範囲の事柄、たとえば先述したようなアンダークラスへの体感不安や緩和ケアの場面でのそれは排除される。このように、心理主義に軸足を置いたナラティブは包摂されつつ排除される。

他方で、ただ排除されるだけの語りが、階級、階層、格差といった社会のハード面での語りである。もちろんこれらの事柄はメディアに取り上げられ、大学の授業で語られており、なぜ排除といえるのか、と思う向きもあるかもしれない。ただ、たとえば大学という空間はこうした側面では極めて均質な空間であり、実感をもたれにくい。また正規・非正規という雇用形態の差、自己責任などの別の語りに転調されて語られたり、政治的イシューから遠ざけられることで、不可視化されたりする。

心理主義的なナラティブを包摂し、社会的なナラティブを排除する社会が現代社会の一つの側面なのである。それは社会の統治に関するコストの問題なのか。心理主義による「社会的なもの」の分断と個人化によるものなのか。あるいは、「良い」社会構想についての意識の変化、ひいてはそのような意識をもたなくとも良いという構えなのか、さらなる検討が必要であろう。

終わりに

本稿では、ナラティブ研究への注目の始原について、大きな物語から小さな物語へ、という社会構造・意識の変化から説き起こした。それと関連した形で、研究手法や実践への研究する側の関心の変化が、大きな物語としての社会構造への問いと変革から、小さな物語としてのナラティブの創出と承認へと移りかわったことをみた。

その上で、ナラティブ的転回が臨床場面でもっていった自己の書き換えというアイデアとそれを支える相互行為場面の装置について、セルフヘルプ・グループの原理から説き起こした。それは、自己を関係性の中における物語の束と見なすことで、社会構造

を変えるよりはむしろ自己や関係へのものの見方を変えることであり、それが担保される場の創出を目指すものであった。さらに、時空間上に可能な時間（現在から未来）と場（日常実践）での問題状況へのものの見方を変えることを促すものであった。

そして、セルフヘルプ・グループの登場と心理主義的なナラティブの隆盛との関わりを説き起こした。そこでは、自己自身、とりわけその心のありようをめぐる物語の書き換えに向かう意識の高まりが、心理主義的な語彙の提供と相互補完関係にあることを示した。

この構図が、社会構造上の問題を取り上げるストーリーを語りにくくすることによって、問題を個人の心に還元する心理主義を一層推し進める。さらに、ある心理主義的な物語が用意されることによって、それが問題の「正しい」語りとして流通してしまう危険性がある。たとえば世代間連鎖といった考えが容易にドミナント・ストーリーと化してとりこまれることで、虐待やDVをめぐる物語がそれにとりこまれてしまう危険性を示した。

これらの検討の下に、ヤングのアイデアを元に現代社会のナラティブの特徴を「包摂的排除」として示した。心理主義的なナラティブは、個人化し小さな物語が主流となった。それは大きな物語の衰退という社会背景とマッチするものであり、問題状況にある人々にとって身近なもので自らの問題と親和性を感じやすい。また専門家が提供し始めたこともあり、社会的に包摂されやすい。

ただ、包摂されるのは社会的に低コストなナラティブだけかもしれない。また社会構造のハード面を突くナラティブは排除されたまま放置されている。あるいは散発的に登場するものの、自己責任の言説の下、沈黙を強いられている。このナラティブの配置の是非が今日問われているといえよう。

註

- 1) リオタールにより提唱された「大きな物語の終焉論」は、単に西欧近代が用意した物語が終わっ

たに過ぎないという批判がその当初からつきまとっている。また、ここでいう物語とは、文明史的なものでナラティブ論で使われるそれとは異なる意味であることを断っておく。

- 2) もちろん計量=大きな物語、定性=小さな物語という単純な二項対立ではない。ただ、質的調査が制度として導入され始めた90年代初頭はこうした構図が意識されていた面はあろう。
- 3) もちろん研究上の背景としては、哲学・倫理学等の言語論的・意味論的な転換を受け、人々の語りの内容そのものへの注目という流れがある[Bruner, 1990=1999等]。
- 4) 同時に、大きくは社会への意義申し立てまでやカミングアウトにいかに至りうるのか、また至ることができない状況をどのように捉えるか、も問われる。
- 5) この臨床心理士の制度化における組織内外の対立や経緯などは拙稿[崎山, 2008]を参照されたい。
- 6) この他者のナラティブに居合わせ、その承認であることはナラティブ論的転回に触発された現代社会における、あるいは時空を超えた倫理的基礎づけともされている。
- 7) もちろん、定量調査と定性調査が常に対立するわけではないし、定性調査はナラティブ論にすべて基礎をおいているというわけではないことは、今日的には自明である。このような記述は、議論を一般化しつつ社会意識論と調査への研究者の志向をつなぐためのものである。また、筆者が実体験したそれにも近い。
- 8) もっとも、近年では質的研究のノーマル・サイエンス化によってこうした意識、特に方法論における良い意味での周到さがみられなくなりつつあるが。
- 9) もちろん、専門家にも開かれたセルフヘルプ・グループもある。だがそこで果たす役割はやはり医療機関におけるそれとは異なるとされる。詳細は伊藤の論考[伊藤, 2009]を参照されたい。
- 10) ここでベラーは、セラピー文化と心理主義化との親和性を指摘しているが、また他方でセルフヘルプ・グループも大きくは自己実現を基調としたセラピー文化とともに登場してきたこともしばし

ば指摘される [片桐, 2017]。

- 11) こうした折衷的な方法は、社会問題の構築主義の進展との調停の側面もあった。構築主義の暴露作用と臨床的な効果とが一致する場合には、現実の相対化をもたらすが純粋な理論的水準では対立したりする面もある。
- 12) こうした語りをめぐるポリティクスとしては、いわゆる歴史修正主義において、ナラティブを語ることが出来ることと抑圧する権力作用と、記憶という時間軸とを交差させる形でしばしば展開されている [高橋, 1995等]

文献

- 浅野智彦 2001『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』勁草書房
- Bellah, et. al. 1986 *Habits of Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press. = 1991 島蘭進・中村圭志訳『心の習慣：アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房
- Berger, P. & Luckman, T. 1966 *The Social Construction of Reality*, Doubleday Company. = 1977 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社
- Bruner, J. 1990 *Act of Meaning*, Harvard University Press. = 1999 岡本夏木他訳『意味の復権：フォーカサイコロジーに向けて』ミネルヴァ書房
- Frank, W. A. 1995 *The Wounded Storyteller + Body, Illness, and Ethics*, The University of Chicago Press. = 2001 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手：身体・病い・倫理』ゆみる出版
- Gartner, A. & Riessman, 1977 *Self-Help in the Human Service*, Jossey-Bass Publisher. = 1985 久保絃章監訳『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際：人間としての自立と連帯アプローチ』川島書店
- Gergen, K. J.. & McNamee, S. 1992 *Therapy as Social Constructrion*, Sage. = 1997 野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー』金剛出版
- 伊藤智樹 2009『セルフヘルプ・グループの自己物語論：アルコールリズムと死別体験を例に』ハーベスト社
- 片桐雅隆 2017『不安定な自己の社会学：個人化のゆくえ』ミネルヴァ書房
- Kleinman, A. 1988 *The Illness Narratives; Suffering, Healing and the Human Condition*, Basic Book. = 1996 江口重幸他訳『病の語り：慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房
- Kitsuse, I. 1980 "Coming Out All Over; Deviants and the Politics of Social Problems", *Social Problems*, 28-1, pp. 1-13
- 草柳千早 2004『曖昧な生きづらさと社会』世界思想社
- Liotard, J.. F. 1979 *La condition postmoderne*, Paris = 1986 小林康夫訳『ポスト・モダンの条件：知・社会・言語ゲーム』水声社
- 野口裕二 2005『ナラティブの臨床社会学』勁草書房
- Plummer, K. 1995. *Telling Sexual Stories; Power, Change, and Social Worlds*, Routledge. = 1997 桜井厚他訳『セクシュアル・ストーリーの時代』新曜社
- 崎山治男 2007「社会病理診断と介入のはざまで (研究動向・社会病理)」『社会学評論』57-4, pp. 809-821
- 2008「心理主義化と社会批判の可能性」崎山治男他編『〈支援〉の社会学：現場に向き合う思考』青弓社, pp. 163-185
- 斎藤清二 2011『ナラエビ医療学講座：物語と科学の統合を目指して』北大路書房
- 2014『関係性の医療学：ナラティブ・ベイスト・メディスン再考』遠見書房
- 2016『改訂版 医療におけるナラティブとエビデンス：対立から調和へ』遠見書房
- 高橋哲哉 1995『記憶のエチカ：戦争・哲学・アウシユヴィッツ』岩波書店
- White, M. & Epston, D. 1990 *Narrative Means to Therapeutic End*, W. W. Norton & Company. = 1991 小森康永訳『物語としての家族』金剛出版
- Young J. 1999 *The Exclusive SOciety: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, Sage. = 2007 青木秀男他訳『排除型社会：後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版
- 2007 *The Vertigo of Late Modernity*, Sage. = 2008 木下ちがや他訳『後期近代の眩暈：排除から過剰包摂へ』青土社

Psychologicalization in Contemporary Society through
the Narrative Approach :
Inclusion by the Narratives, Exclusion from the Narrative

SAKIYAMA Haruoⁱ

Abstract : The aim of this paper is to consider the relationship between the rise of narrative approach and psychologicalization. The trend of narrative approach began at the end of the “big story” in modern society. Then, this approach tried to capture the “little story,” namely, many events of everyday human life. Sociology and Psychology have been influenced by this trend.

It is true that the narrative approach has been able to deal with people’s realities in ways that a quantitative approach couldn’t analyze. In addition, it has resulted in clinical effects, because people can change themselves by using the narrative approach.

However, the narrative approach has focused only on mental aspects of the human experience. So, it has often proceeded the psychologicalization of social problems. From this point of view, this paper seeks to show the features of contemporary narrative approach represented by the idea of “Inclusive Exclusion.”

Keywords : narrative approach, psychologicalization, inclusive exclusion, self-story

ⁱ Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University